ロシア共産党(ボ)第七回大会

一　戦争と講和についての報告　　3 月 7 日

政治報告は、中央委員会のとった諸方策を列挙したものとすることもできようが、現在の時期にとって緊要なのは、このような報告ではなくて、わが国の革命全体の概観である。(P81)

10月社会主義革命の成功とブルジョア革命と社会主義革命の違い、社会主義革命の前代未聞の困難な任務、――組織的任務

内乱は事実となった。革命のはじめに、いな戦争のはじめにさえ、われわれが予言したことと、そしてそれにたいして、当時、社会主義者の仲間のかなりの部分が不信、あるいは嘲笑の態度をとったこと、すなわち、帝国主義戦争を内乱に転化せよということは、1917年 10 月 25 日には、参戦諸国のうちでも最大の、またもっともおくれた国の一つにとって、事実となったのである。この内乱では、住民の圧倒的多数がわれわれの味方となり、この結果、勝利は非常にたやすくわれわれにあたえられた。(P82)

……長い歴史的な経験によって、大衆が実践的に点検した「全権力をソヴェトへ」というわれわれのスローガンは、大衆の肉となり血となったのである。

……ブルジョア革命が当面したただ一つの任務は、以前の社会のすべてのきずなを一掃し、すて去り、破壊するということであった。あらゆるブルジョア革命は、この任務を遂行することによって、この革命にもとめられているいっさいのことを遂行する。すなわち、それは、資本主義の成長を強めるのである。

社会主義革命はこれとはまったく異なった状態にある。歴史のジグザグによって、社会主義革命をはじめなければならなかった国にとって、その国がおくれていればいるほど、古い資本主義的関係から社会主義的関係への移行は、それだけ困難である。ここでは、破壊という任務のうえに、新しい、前代未聞の困難な任務、――組織的任務がつけくわわる。1905年の偉大な経験をなめてきたロシア革命の人民的な創造力が、1917年2月に、まだソヴェトをつくりださなかったならば、ソヴェトは、10月にはけっして権力をにぎることはできなかったであろう。なぜなら、成功はただ、数百万人をふくむ運動の組織形態が、すでにできあいのものとして存在していたか否かにかかっていたからである。このできあいの形態こそソヴェトであった。だから、政治的分野でわれわれをまっていたのは、輝かしい成功であり、われわれの経験したひとつづきの凱旋行進であった。(P83-84)

生まれたばかりのソヴェト共和国の二つのきわめて困難な任務のうちの「社会主義的経済的有機体に組織すること」について

……ソヴェト共和国は一挙に生まれた。だがまだ、二つのきわめて困難な任務(「社会主義的経済的有機体に組織すること」と「国際問題」――注青山)がのこっていた。その解決は、わが国の革命が最初の数カ月におこなったような凱旋行進ではけっしてありえなかった。――これからさき社会主義革命が、巨大な困難を伴う任務に当面するだろうということについては、われわれには疑問はなかったし、また、ありえなかった。

第一に、それは、あらゆる社会主義革命が当面する内部的組織という任務であった。社会主義革命がブルジョア革命と異なる点は、後者のばあいには、資本主義的関係のできあいの形態があるが、ソヴィエト権力――プロレタリア権力――は、資本主義のもっとも発展した諸形態をとりあげないとすれば、これらのできあいの諸関係をうけとるわけではないということにある。それも、このもっとも発展した諸形態も、実は、工業の小さな上層をとらえていただけであって、農業にはまだほんのわずかしかふれていない。記帳の組織、巨大企業の統制、国家経済機関全体を、一つの巨大な機構に、数百万の人々が一つの計画に指導されるような仕方で活動する経済的有機体に転化すること、――これこそわれわれの肩かかっている巨大な組織上の任務である。この任務は、現在の労働条件のもとでは、われわれが首尾よく内乱の任務を解決したときのように、けっして「ウラー」をさけんで解決することをゆるさなかった。問題の本質そのものが、このような解決をゆるさなかった。……わが革命の任務にたいして考えぶかい態度をとろうとした人には、だれの目にも、自己規律という困難な、長い道によってのみ、戦争が資本主義社会にもたらした腐敗にうちかつことができるということ、また、きわめて困難な、長い不屈の道によってのみ、この腐敗を克服し、増大していく腐敗分子を征服できるということが、ただちに明らかとなった。この腐敗分子は、革命とは、それからできるだけ多くのものをとりこんでおいて、古いきずなからのがれる方法であるとみなしたのである。こういう連中が数多く出てくることは、信じられないくらいの崩壊の時期の小ブルジョア的な国では、避けられないことであった。そして彼らとの、百倍も困難な、すこしも目ざましい立場をあたえてくれる見込みのない闘争がひかえている――われわれはたったいまこのたたかいを開始したばかりである。（P84-85）

ロシア革命をもたらした客観情勢と革命をつづけることの困難さ

……ロシア革命は国際帝国主義の一時的な故障を利用したにすぎない。というのは、この機械が一時とまったからであり、この機械は列車が手押しの一輪車にむかってすすみ、それを粉砕してしまうように、われわれにむかってくるはずのものであったが、――二つの強盗グループが衝突したために、機械がとまってしまったのである。革命運動はここかしこで成長したが、例外なくすべての帝国主義諸国では、それは多くのばあい、まだはじめの段階であった。その発展テンポは、われわれのところとは、まったく異なっていた。ヨーロッパにおける社会主義革命の経済的前提についてよく考えていた人にとっては、ヨーロッパで革命をはじめることははるかに困難であり、われわれのところでは、はるかに容易だが、革命をつづけることはヨーロッパよりもいっそう困難であろうということは、だれの目にもはっきりしないわけにはいかなかった。そしてわれわれがまれにみる困難な、歴史における急転換を体験しなければならないのは、こういう客観情勢の仕業である。（P87-88）

わが国の革命が単独のものにおわるならば、革命の勝利は望みのないものであるが、国際社会主義革命が起きることを前提に運動をすすめてはならない

……歴史は、いまやわれわれを異常に困難な立場においたのである。われわれは、前代未聞の困難な組織的活動をやりながら、一連のきわめて苦しい敗北をも経ていかねばなら

ない。世界史的な規模でみるばあい、わが国の革命が単独のものにおわり、他の国々で革命運動がないとしたら、わが革命の最後の勝利は望みのないものであることは、すこしも疑問の余地がない。われわれはボリシェヴィキ党だけで全事業をとりくんだのであるが、われわれはつぎのように確信して、この事業を一身にひきうけたのである。すなわち、革命はすべての国々で成熟しつつあり、われわれがどのような困難を経験しようと、どのような敗北をなめる運命にあろうと、結局は――まずはじめにではなく――国際社会主義革命はやってくるだろう、――なぜなら、それはすすんでいるからである。それは成熟をとげるだろう、――なぜなら、それは熟しつつあり、成熟するであろうからである。これらすべての困難からわれわれをすくうものは――くりかえして言おう――、全ヨーロッパ的な革命である。この真理、まったく抽象的なこの真理から出発し、この真理に導かれながらも、われわれは、それが時とともに空文句にかわってしまわないように注意していかなければならない。なぜなら、あらゆる抽象的な真理は、もし諸君がなんの分析もせずに適用するときには、空文句にかわってしまうからである。もし諸君が、どのストライキの背後にも、革命というヒドラ(怪蛇)がひそんでおり、このことを理解しないものは社会主義者ではない、というならば――それは正しい。しかり、どのストライキの背後にも、社会主義革命がかくれている。だが、もし諸君がどのストライキもみな、社会主義革命への直接の一歩であるというならば、諸君はもっとも空虚な文句を言っていることになる。(P89)

先進諸国における世界社会主義革命は準備もなしに始まるものではない、そのことを学んだ大衆は、いっさいの決議を数百万の大衆の討議にかければ、自分の経験によって、事実によって点検することで、正しい結論を下すだろう

革命は、われわれが待っていたように、早くはやってこないであろう。歴史はこのことをしめした。このことを事実として受けとることができなければならないし、先進諸国における世界社会主義革命は、ロシアで――ニコライとラスプーチンの国で、革命がはじまったように、たやすくはじめることはできないということ、このことを考慮にいれることができなければならない。ロシアでは、住民の大部分にとっては、辺境にどんな民族が住んでいようと、そこでなにがおころうと、どうでもよいことであった。こういう国では、革命をはじめることは容易であった。それは――羽毛をもちあげるようなものであった。

しかし、資本主義が発達し、最後の一人まで民主主義的文化と組織性とがあたえられている国では、準備もなしに革命をはじめることは、まちがいであり、ばかげている。ここではわれわれは、社会主義革命の苦しみにみちた開始期にやっとさしかかったばかりである。これが事実である。われわれにわからず、だれにもわからないことは、この社会主義革命が数週間中に、それどころか数日中に勝利できるものかどうかということである――このことは十分にありうることであろう――、しかしこれを賭けてはならない。避けられない異常な困難、異常に苦しい敗北にたいする備えをもつことが必要である。なぜなら、ヨーロッパでは、革命は、あすはじまるかもしれないとはいえ、まだはじまっていないからであり、いったんはじまるならば、もちろん、われわれの疑惑がわれわれを苦しめることもないであろうし、革命戦争の問題もなくなるであろうし、そしてひとつづきの凱旋行進となるだろう。そうなるであろう、そうなることは避けられないであろう、しかしいまはまだそうではない。これが、歴史がわれわれにおしえた単純な事実であり、歴史はこの

事実でわれわれをしたたかぶったのである。だが、ぶたれたものはぶたれないものより二倍も利口になる。だから私は、ドイツ軍は攻撃に出られないだろうとか、「ウラー」で〔突撃によって〕やっつけることができるだろうなどと期待していたわれわれが、歴史にしたたかぶたれたのちには、この教訓は、わがソヴェト組織のおかげで、全ソヴェト・ロシアの大衆の意識のなかに、きわめてすみやかにはいっていくだろうとおもう。彼らはみな活動をはじめ、会合し、大会を準備し、決議をし、おこったことについてふかく考えている。わが国でいまおきていることは狭い党員グループのあいだにのこっていた古い革命前の討論のようなものでなく、いっさいの決議は大衆の討議にかけられる。大衆は、これらの決議を自分の経験によって、事実によって点検することを要求しており、けっして軽々しい言説に熱中もしないし事件の客観的な進行によってしめされる道からふみはずさせられることもない。……数百万の大衆は、――ところで、政治というものは、数百万のいるところではじまるものであり、数千人ではなく数百万のいるところでのみ、真剣な政治ははじまるのである――この数百万人は、軍隊とはなにかを知っており、戦線からかえってくる兵士たちを見たのである。一人一人の人間ではなく、真の大衆をとりあげるならば――、彼らは、われわれがたたかうことができないこと、戦線では、あらゆる人間がおよそ考えられるいっさいのことにたえつくしたということを知っている。（P93-95）

……もしヨーロッパ革命の生まれるのがおくれるならば、われわれを待っているのは、もっともいたましい敗北であるだろう。なぜなら、われわれには軍隊がないからであり、われわれには組織がないからであり、そしてまた、この二つの任務を、いま解決することはできないからである。事態に順応することができず、泥濘（ぬかるみ）のなかを腹ばってすすむ気になれないとしたら、こういうものは革命家ではなく、法螺吹きである。そしてまた、私がこのようにすすむことを提案するのは、それが私の気にいっているからではなく、ほかに道がないからであり、歴史というものは、革命がいたるところで同時に成熟するほどうまくできてはいないからである。

事件は、帝国主義と衝突する試みとして内乱がはじまる、というような成行きをとってくるだろう。この試みは、帝国主義が腐敗してしまったこと、どの軍隊のなかでもプロレタリア分子が立ちあがっていること、を証明したのである。たしかに、われわれは国際的・世界的な革命をみることであろう。しかしいまのところ、それは非常にきれいな、非常に美しいおとぎ話である。……しかし革命が、われわれの希望どおりにおこらないとしたら、あすにも勝利するのでないとしたら、そのときはどうなるのか？そのときは大衆は諸君にむかって言うだろう、――君たちは、冒険家として行動した。君たちは事件の幸運な成行きに賭けたが、そんなものはやってこなかった、不可避的にやってくるであろうが、いまはまだ成熟しきっていない国際革命のかわりに来あわせたこの情勢には、役にたたないことがわかった、と。（P97−98）

九　綱領の改正と党名の変更についての報告　　から

ソヴェト権力の意義

つぎに、ソヴェト型の国家の特徴づけをあたえることが、われわれの任務である。この問題については、私は、『国家と革命』という著書のなかて理論上の見解を述べようと努力した〔本全集、第 25 巻、410 ～ 533 ページ〕。国家にかんするマルクス主義の見解は、これまで支配的であった西ヨーロッパの公認の社会主義によって、極度にゆがめられたように、私にはおもわれる。このことは、ロシアのソヴェト革命の経験と、ソヴェトをつくりだした経験とによって、すばらしく明瞭に確証された。わが国のソヴェトのなかには、粗雑な点や、未完成な点がまだたくさんある。これは疑いをいれないことである。これは、ソヴェトの活動をしらべた者のだれにも明らかなことである。だが、ソヴェトにあって重要なもの、歴史的に貴重なもの、社会主義の世界的発展における一歩前進をあらわすものは、ここで国家の新しい型がつくりだされたということである。パリ・コンミューンのばあいには、このことは数週間、ひとつの都市でやられたにすぎなかったし、人々は自分のしていることを自覚していなかった。コンミューンは、それをつくりだした人々によって理解されなかった。彼らは、目ざめた大衆の天才的な本能によって創造したが、フランスの社会主義者の流派で、自分のしていることを自覚していたものはひとつもなかった。われわれは、パリ・コンミューンと、ドイツ社会民主党の多年にわたる発展とに立脚しているおかげて、ソヴェト権力をつくりだすにあたって、自分のしていることをはっきりと理解できるような条件にある。ソヴェトのなかには、わが国の小ブルジョア性の遺物である粗野や、無規律がきわめて多いにもかかわらず、国家の新しい型が人民大衆によってつくり出されている。それは、数週間ではなくて数カ月のあいだ、一都市だけではなくて広大な一国のいくつかの民族のあいだで、実施されている。このソヴェト権力の型が、フィンランドのようにあらゆる点て非常にちがった国までひろがったことは、この型の真価をしめしたものである。フィンランドにはソヴェトはないけれども、その権力の型はやはり新しい、プロレタリア的なものである。だから、このことは、理論上争う余地のない事がら、すなわち、ソヴェト権力が、官僚も警察も常備軍もなく、ブルジョア民主主義を新しい民主主義――勤労大衆の前衛を抜擢して、彼らを立法者にも、執行者にも、軍事的守護者にもする民主主義、大衆を再教育する能力のある機関をつくりだす民主主義――に代える新しい型の国家であるということの証明である。

ロシアでは、これはようやくはじまったばかりであり、しかもそれは、まずいやり方ではじめられた。われわれが、自分のはじめたもののなかのまずい点を意識しているかぎり、歴史が相当の期間このソヴェト権力のために働く可能性をわれわれにあたえてくれさえすれば、われわれはそれを克服することができるであろう。こういうわけで、国家の新しい型の特徴づけは、わが党の綱領のなかでぎわだった地位を占めなければならないと、おもわれる。残念なことに、われわれはいま政府の活動に従事しながら、党の小委員会を召集して公式の綱領草案を作成するひまさえなかったほど、信じられないようなあわただしさで綱領の仕事をしなければならなかった。代議員の同志諸君の手もとにくばった資料は、下書きとしか呼ばれていないし〔本巻、152~158 ページ〕、また下書きであることはだれにもはっきりおわかりになろう。そこでは、ソヴェト権力の問題にかなり大きな地位があたえられているが、この点にわれわれの綱領の国際的意義が現れなければならないと、私は考える。われわれの革命の国際的意義を、呼びかけやスローガンやデモンストレーションや檄、等々にかぎることは、大きな誤りだとおもわれる。それだけではない。われわれ

はヨーロッパの労働者に、われわれがどういう仕事に着手したのか、それにどう着手したのか、それをどう考えたらよいのか、具体的にしめさなければならない。そうすれば、彼らは、どうやって社会主義を達成するかという問題に、具体的に直面させられるであろう。彼らはここで見てとるにちがいない。ロシア人はりっぱな課題に取り組んでいる、彼らはまずいやり方でそれに取り組んでいるが、われわれはそれをもっとうまくやりとげるだろう、と。このためには、できるだけ具体的な資料を提供し、われわれがどういう新しいものをつくりだそうと試みたかを、しめさなければならない。ソヴェト権力は、国家の新しい型である。それの任務や構成のあらましをえがきだすようにつとめよう。きわめて多くの混沌とした点、つじつまの合わない点のある民主主義のこの新しい型がつくられた理由を説明し、その精髄をなすものが、勤労者への権力の移行てあり、搾取や弾圧機関の排除であることを、説明するようにつとめよう。国家は弾圧機関である。搾取者を弾圧することは必要だが、警察の手で彼らを弾圧することはできない。彼らを弾圧することのできるのは、大衆自身のほかにはない。機関は、ソヴェトのように、大衆と結びついたものでなければならないし、大衆を代表するものでなければならない。ソヴェトははるかに大衆に近いし、また、大衆に近づく可能性をあたえる。それは、この大衆を教育するより大きな可能性をあたえる。われわれは、ロシアの農民がまなぼうとつとめているのをよく知っているが、彼らが書物からまなぶのでなく、自分の体験からまなぶことを、われわれはのぞんでいる。ソヴェト権力は一つの機関である。すなわち、大衆がただちに全国的な規模で国家の統治と生産の組織とをまなびはじめるようにさせるための機関である。これははなはだ困難な任務である。しかし、歴史的に重要なことは、われわれがこの任務の解決に取り組むことであり、しかもわが国一国の立場からそれを解決するのでなく、ヨーロッパの労働者の援助をもとめることによってそれを解決するということである。われわれは、まさにこの一般的な立場からわが党の綱領を具体的に説明しなければならない。だからこそ、われわれは、これをパリ・コンミューンの道の継続だと考えるのである。だからこそ、この道に立ったヨーロッパの労働者は、われわれをたすけることができるだろうと、われわれは確信するのである。彼らは、われわれのやっていることを、もっとうまくやりとげることができるであろうが、そのさい、重点は形式的な見地から具体的な条件にうつされる。以前には集会の権利の保障というような要求がとくに重要であったとすれば、集会の権利についてのわれわれの現在の立場はつぎのようなものである。いまではだれにも集会を妨げることはできないから、ソヴェト権力が保障しなければならないのは、集会の会場だけである、と。ブルジョアジーにとって重要なのは、大げさな原理の一般的な宣言である。「すべて市民は集会の権利をもっているが、ただしそれは、野天の集会である。われわれは会場を君らに提供はすまい」と。これに反してわれわれは言う、「空文句をもっとすくなくし、実質をもっと多くせよ」と。宮殿を没収しなければならないし、タヴリーダ宮殿ばかりでなく、その他多くの宮殿をも没収しなければならないが、集会の権利についてはわれわれはない。そして、このことは、民主主義的綱領の他のすべての条項にも、およぼされなければならない。われわれ自身が裁判官とならなければならない。市民は一人のこらず裁判や国の統治に参加しなければならない。そして、われわれにとって重要なことは、勤労者の全員を一人のこらず国家の統治に引き入れることである。これは、はなはだ困難な任務である。しかし、社会主義を少数者の手で、党の手で導入することはできない。社

会主義を導入することは、幾千万人が自分でそうすることをまなびとったときに、彼らだけがなしうることである。われわれは、大衆が書物や講義から、それをまなぶのをたすけるのでなく、彼らが自分でただちにこの仕事に着手するのをたすけることを目標にしているのを、自分の功績だと考えている。だからこそ、われわれが自分のこの任務を具体的に、明瞭にしめすならば、われわれは、ヨーロッパの全大衆が、この問題を討論し実践的に提起するのを促すことになるだろう、われわれは、たぶん自分のしなければならないことをまずいやり方でやっているだろうが、しかし、われわれは大衆に、しなければならないことをするよう促している。もし、わが国の革命がおこなっていることが偶然ではなく――われわれは、それが偶然ではないことを、深く確信しているが――、またわが党の決定の産物でもなくて、マルクスが人民革命と名づけたあらゆる革命、すなわち、人民大衆が、古いブルジョア共和国の綱領を繰りかえすことによってではなく、彼ら自身のスローガンにより、彼ら自身の奮闘によって、みずからおこなうあらゆる革命の不可避的な産物であるなら、もしわれわれがこのように問題を提出するなら、われわれはもっとも重要なものをなしとげることができるであろう。ここでわれわれは最大限綱領と最小限綱領との区別をなくすべきかどうか、という問題に近づく。なくすべきであり、また、なくすべきではない。私はこの区別をなくすことをおそれはしない。というのは、昨年の夏にはまだおこなわれていた見地が、いまでは成りたたなくなったからである。われわれがまだ権力をにぎっていなかったときには、私は、そうするのはまだ［早い」と言った〔本全集、第 26 巻、165 ～ 170 ページ］。われわれがすでにこの権力をにぎっており、それをためしてみた今日では、それはもう早くはない。いまでは、われわれは古い綱領のかわりに、新しいソヴェト権力の綱領を書かなければならなくなった――もっとも、けっしてブルジョア議会制度の利用を放棄しはしないが――。われわれがうしろへ投げもどされることはありえないと考えるのは、空想である。

ロシアがソヴェト共和国をつくりだしたことは、歴史上、否定できないことである。われわれは、すこしでもうしろへ投げもどされたなら、――もし階級的な敵対勢力がわれわれをこの古い陣地へ追いもどすなら――、ブルジョア議会制度の利用を放棄せずに、経験によって獲得されたものにむかって、すなわちソヴェト権力、ソヴェト型の国家、パリ・コンミューン型の国家にむかって、すすむであろう。最小限綱領のかわりにわれわれは、ソヴェト権力の綱領をもちこむであろう。国家の新しい型の特徴づけは、われわれの綱領のなかで有力な地位を占めなければならない。

われわれがいますぐ綱領を作成できないことは、明らかである。われわれは、綱領の基本的諸命題をつくりあげ、それを小委員会か中央委員会に付託して、基本テーゼを作成させるようにすべきである。あるいは、もっと簡単に、すでにテーゼをつくりあげたブレストーリトウスク会議についての決議〔本巻、116 ～ 117 ページ〕をもとにして、それを作成してもよい。ロシア革命の経験にもとづいて、ソヴェト権力についてのそういう特徴づけをあたえ、つぎに実践的改革の諸提案をおこなわなければならない。ここで、歴史的部分で、土地と生産の収奪がいまはじめられていることを、指摘しておく必要があるとおもわれる。ここで、われわれは、消費を組織したり、銀行を普遍化し、住民自身がおこなう公共の簿記、計算、統制のための国家施設の全国的な網に、この銀行を変えたりする具体的な任務を提起する。この公共の簿記、計算、統制は、社会主義がさらに歩をすすめる基

礎となるものである。このもっとも困難な部分は、わがソヴェト権力の具体的な諸要求の形で定式化すべきだと、私は考える。すなわち、われわれが現在なにをしようとしているか、銀行政策の分野で、また物資の生産の組織や、交換、計算および統制の組織や、労働義務制の実施等々の仕事で、どういう改革をおこなうつもりでいるか、ということである。われわれは、できるようになりしだい、われわれがこの方向でとったいろいろの措置を、小さなものも極小のものもふくめて、これにつけくわえよう。ここでは、われわれがなにをはじめたか、なにが未完成になっているかを、完全に、正確に、明瞭に規定しなければならない。われわれのはじめた仕事の大部分が未完成であることを、われわれはよく知っている。われわれは、綱領のなかで、現にあるもの、われわれがこれからやろうとしているものを、すこしも誇張せずに、完全に客観的に、事実からはなれずに叙述しなければならない。われわれは、ヨーロッパのプロレタリアートにこの真実をしめして、これをやらなければならないのだと言おう。これは、彼らが、ロシア人はこれこれのことをまずいやり方でやったが、われわれはそれをもっとうまくやりとげる、と言うようにするためである。そして、この努力が大衆を熱中させるなら、社会主義革命は不敗となるであろう。徹頭徹尾略奪的な帝国主義戦争が、いますべての人の眼前でおこなわれている。このことを暴露し、この戦争が社会主義運動に対抗する帝国主義者の連合であることを、しめさなければならない。以上が、諸君と話合う必要があると私が考えている一般的な論点であって、私は、これにもとづいてつぎのような実際的な提案をする。すなわち、いますぐ、この問題について基本的な意見の交換をおこない、ついで、たぶん、すぐこの場で若干の基本的なテーゼを作成すること。もしこれが困難であるとみとめられるなら、いますぐそうすることはやめて、綱領問題を中央委員会か特別な委員会に付託し、現存の資料にもとづき、また大会の速記録ないしはそれにかわる書記の記録にもとづいて、党綱領を起草することを、同委員会に委任すること。この綱領は党名をただちに変更しなければならない。これは現在われわれに実行できることだと、私にはおもわれる。そして、諸事件に迫われて、われわれの綱領を成文化する点で準備が不足しているのであるから、いまはこうするほかはないことに、だれでも同意するであろうと、私は考える。私は、数週間もあればこれはつくれると、確信している。わが党の各派のなかには十分な理論的能力があるから、数週間もあれば綱領はできあがるであろう。もちろん、成文化の仕事に必要なおちついた気持て、数ヵ月間この仕事に専念するだけの余裕がわれわれにないので、構文上や文体上の欠陥はさておき、綱領にはたくさんの誤りがあるかもしれない。

われわれは、自分がソヴェト権力にこの綱領を実現する可能性をあたえているという完全な確信をもって、自分の活動の過程で、そうした誤りをすべて訂正するであろう。われわれが現実からはなれないで、ソヴェト権力が国家の新しい型、プロレタリア独裁の形態であること、われわれが民主主義に別の任務を課したこと、われわれが社会主義の課題を、「収奪者の収奪」という一般的抽象的な定式から銀行および土地の国有化のような具体的な定式に翻訳したこと、これらのことをすくなくとも正確に定式化するならば、それは綱領の本質的な部分となるであろう。

……われわれは、綱領のなかでこの思想を具体的に述べよう。具体的にたしかめられた事実から一歩もはなれずに、理論的にこの思想を述べなければならない。西欧では、これは別の形で具体化されるであろう。もしかすると、われわれは誤りをおかしているのか

もしれないが、西欧のプロレタリアートがその誤りを訂正してくれるものと信じる。そして、われわれは、ヨーロッパのプロレタリアートに、われわれの仕事を援助してくれるように、懇請する。

こういうわけで、われわれは、数週間もあればわが党の綱領を作成することができる。そして、もしわれわれが誤りをおかすとすれば、生活がそれを訂正するであろう。それらの誤りは、達成されるであろう積極的な成果にくらべれば、すべてとるにたりない軽微なものであろう。(P131～138)　……は青山の略

第27巻『第七回大会(ボ)ロシア共産党』1918年3月6~8日(P81-138)

ソヴェト権力の意義のポイント

わが国のソヴェトのなかには、粗雑な点や、未完成な点がまだたくさんある。これは疑いをいれないことである。これは、ソヴェトの活動をしらべた者のだれにも明らかなことである。しかし、これはようやくはじまったばかりであり、われわれが、自分のはじめたもののなかのまずい点を意識しているかぎり、歴史が相当の期間このソヴェト権力のために働く可能性をわれわれにあたえてくれさえすれば、われわれはそれを克服することができるであろう。そして、ソヴェトにあって重要なもの、歴史的に貴重なもの、社会主義の世界的発展における一歩前進をあらわすものは、ここで国家の新しい型がつくりだされたということである。

ソヴェト権力は、官僚も警察も常備軍もなく、ブルジョア民主主義を新しい民主主義――勤労大衆の前衛を抜擢して、彼らを立法者にも、執行者にも、軍事的守護者にもする民主主義、大衆を再教育する能力のある機関をつくりだす民主主義――に代える新しい型の国家である。

われわれはヨーロッパの労働者に、われわれがどういう仕事にどう着手したのか、それをどう考えたらよいのか、具体的にしめす必要がある。そうすれば、彼らは、どうやって社会主義を達成するかという問題に、具体的に直面させられ、「ロシア人はりっぱな課題に取り組んでいる、彼らはまずいやり方でそれに取り組んでいるが、われわれはそれをもっとうまくやりとげるだろう」と思うにちがいない。

きわめて多くの混沌とした点、つじつまの合わない点のある民主主義のこの新しい型がつくられた理由を説明し、その精髄をなすものが、勤労者への権力の移行てあり、搾取や弾圧機関の排除であることを、説明するようにつとめよう。(国家は弾圧機関である。搾取者を弾圧することは必要だが、警察の手で彼らを弾圧することはできない。彼らを弾圧することのできるのは、大衆自身のほかにはない。)

ソヴェト権力は一つの機関である。すなわち、大衆がただちに全国的な規模で国家の統治と生産の組織とをまなびはじめるようにさせるための機関である。われわれ自身が裁判官とならなければならない。市民は一人のこらず裁判や国の統治に参加しなければならない。これははなはだ困難な任務である。しかし、社会主義を少数者の手で、党の手で導入することはできない。社会主義を導入することは、幾千万人が自分でそうすることをまなびとったときに、彼らだけがなしうることである。そして、歴史的に重要なことは、われわれがこの任務の解決に取り組むことであり、しかもわが国一国の立場からそれを解決するのでなく、ヨーロッパの労働者の援助をもとめることによってそれを解決するというこ

とである。

ロシア革命の経験にもとづいて、ソヴェト権力についてのこのような特徴づけをあたえ、実践的改革の諸提案をおこなわなければならない。　われわれは、消費を組織したり、銀行を普遍化し、住民自身がおこなう公共の簿記、計算、統制のための国家施設の全国的な網に、この銀行を変えたりする具体的な任務を提起する。この公共の簿記、計算、統制は、社会主義がさらに歩をすすめる基礎となるものである。

われわれがなにをはじめたか、なにが未完成になっているかを、完全に、正確に、明瞭に規定しなければならない。われわれのはじめた仕事の大部分が未完成であることを、われわれはよく知っている。われわれは、綱領のなかで、現にあるもの、われわれがこれからやろうとしているものを、すこしも誇張せずに、完全に客観的に、事実からはなれずに叙述しなければならない。　この努力が大衆を熱中させるなら、社会主義革命は不敗となるであろう。

そして、徹頭徹尾略奪的な帝国主義戦争が、いますべての人の眼前でおこなわれている。このことを暴露し、この戦争が社会主義運動に対抗する帝国主義者の連合であることを、しめさなければならない。

われわれは、自分がソヴェト権力にこの綱領を実現する可能性をあたえているという完全な確信をもって、自分の活動の過程で、そうした誤りをすべて訂正するであろう。われわれが現実からはなれないで、ソヴェト権力が国家の新しい型、プロレタリア独裁の形態であること、われわれが民主主義に別の任務を課したこと、われわれが社会主義の課題を、「収奪者の収奪」という一般的抽象的な定式から銀行および土地の国有化のような具体的な定式に翻訳したこと、これらのことをすくなくとも正確に定式化するならば、それは綱領の本質的な部分となるであろう。われわれは、綱領のなかでこの思想を具体的に述べよう。具体的にたしかめられた事実から一歩もはなれずに、理論的にこの思想を述べなければならない。西欧では、これは別の形で具体化されるであろう。もしかすると、われわれは誤りをおかしているのかもしれないが、西欧のプロレタリアートがその誤りを訂正してくれるものと信じる。そして、われわれは、ヨーロッパのプロレタリアートに、われわれの仕事を援助してくれるように、懇請する。

もしわれわれが誤りをおかすとすれば、生活がそれを訂正するであろう。それらの誤りは、達成されるであろう積極的な成果にくらべれば、すべてとるにたりない軽微なものであろう。